

適切な評価をし、その結果を指導に生かすためには、評価すべき内容を理解して評価の観点を定めることがたいせつである。

(一) 評価の観点

評価の観点には、学習指導要領の目標及び指導内容に対して、評価自体が適切かという質的な面と、どの程度まで達成したかという量的な面とが含まれている。

例えば、「旋律のまとまった感じを感じとる」ねらいに対して、「それを正しく感じるができるかどうかを確かめるための目のつけどころ」が適切かという面と、「感じとることができ深さはどの程度か」という到達度の面が同時に観点としておさえられなければならない。

また、音楽科での評価の観点は、いろいろな内容が含まれ、しかも、相互に関連が深い。例えば、「リズム打ちができるか」を取り上げた場合、それは態度でもあり、感覚、技能、理解でもある。各学年の指導内容は、学年の目標に照らして、態度、音楽的感覚、技能、理解の上でまとめられているので評価の観点も、その立場で整理しておくのがよい。そして、その中でどの観点到に重点をおくかは、学習指導の目標によって定めるようにする。

(二) 評価の方法

(1) 何を評価するのか

各題材について目標を具体化し何を学習するのかが、児童生徒に明確に理解されたとき、児童生徒にとっても生きた評価となる。

(2) いつ評価するか

評価は指導の一過程であるという本質をより生かすためにも、常時行われることがたいせつである。学期末の評定のためのテストが評価のすべてでないことをじゅうぶん考慮しなければならない。一般的には題材ごとに、予備・中間・終末の三つに分けて考えることができる。

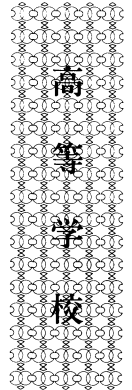
(3) 評価の方法

評価の方法を選択する条件にはア、評価しようとする目的に対して妥当であること。  
イ、評価の結果が信頼できること。  
ウ、实际的で具体的であること。

(三) 教師作成のテストをくふうすること

すでに述べたとおり、目標を具体化し、児童生徒の実態に照らして学習段階を設定し、学習を進める場合最も多く用いられるのは、教師の作成したテストである。また、児童生徒の行動も有力な評価の対象であり観察、指導の積み重ねがたいせつである。

評価はできるだけ多面的に、一人一人の特質をじゅうぶんは握して、効果的な学習指導を進めていきたい。



国語科における学習指導法のくふう  
国語の教室をのぞくと、教材の叙述に従って第一段を読む。次に、むずかしいことばを抽出する。それを辞書であたつてみる。それが終わつたら、口語訳をして、次の段落にうつる。ふたたび前と同じ作業をくり返す——。といった場面によく会うが、それでよいのだろうか。  
生徒にとって、より広がりのある授業、より深まりのある授業、生徒が自ら進んで学習する授業をつくることは

「春望」  
国破山河在  
城春草木深  
↓ 如春望詩、国破山河在、明無余物矣。  
城春草木深、明無人跡矣。  
「司馬温公詩話」(司馬光)

「山河在」によって、もつとたつた都の立派な姿が今やなくなつた、ということであらわし、「草木深」によって、たくさん人が住んでいたこのまちに、今やだれ一人も住んでいないということであらわす。

「奥の細道・平泉のくだり」  
国破れて山河在り、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落とし侍りぬ。  
夏草や兵どもが夢のあと

藤原氏三代の栄耀の跡を前にして、「春望」の詩境は、芭蕉の熱い涙となって具現される。

「千曲川旅情の歌」  
前編の第一節と後編の後半

「前半の第一節」『人生のはかなさ。  
「後編の後半」『千曲川は人の世の愁いも知らぬ顔で昔も今もかわらず、非情に流れ続ける。杜南、芭蕉の感慨と藤原のそれは本質的に同じである。(参考) この三作品は創作過程において影響関係にある。

無限の時の流れの中にはかない人生をみつめ、滅びたもの、なくなったものへの深い悲しみの情感——の詩境

「万葉集・巻一・雑歌・29・30・31」  
過近江荒都時柿木朝臣人麿作歌一首  
并短歌  
「万葉集・巻二・雑歌29」  
柿木朝臣人麿近江国上来至宇治河辺作歌

人麿は、けだし挽歌の詩人である。  
巻一・雑歌29にみる作者の視点は現在から一氣に過去に逆行し、ふたたび現在にまい戻る。その時、旧都の衰亡に対する哀愁は堰を切つてあふれだし、ももしきの大宮処見れば悲しむ」という句となつて結実する。まさに、それは、一瞬美しく輝き、そして無窮の闇に滅びゆく人間の営みのはかなさのイメージである。  
(参考) 「浄瑠璃寺の春」(堀辰雄)

「第二の自然」